The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Roberto Esposito, ”BIOS : Biopolitics and Philosophy”, University of Minnesota Press, 2004
Author(s)	坂本, 明日美
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 255-260
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11385
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Roberto Esposito
BIOS: Biopolitics and Philosophy
University of Minnesota Press, 2004

坂本 明日美

一、はじめに

『ビオス　生政治と哲学』（Roberto Esposito, *BIOS: biopolitica e filosofia*, Giulio Einaudi editore, 2004）は、イタリアの思想家ロベルト・エスポジトによって著され、二〇〇九年にティモシー・キャンベルによる英訳版が出版された。エスポジトは、現在イタリア人文科学研究所の副学長を務め、近代の生政治的状況を主な対象とした政治哲学研究を行っている。エスポジトの主要な著作は『コムニタス』（一九九八）、『イムニタス』（二〇〇二）、『ビオス』の三部作として知られているが、いずれも邦訳されていない。英語版の翻訳者ティモシー・キャンベルは、コーネル大学イタリア語学科の准教授として、近代イタリア文化の研究を行っている。

『ビオス』の出発点となる問いはこうである。「なぜ生[1]の政治はつねに死の政治へと転じるリスクをはらむのか。[2]」エスポジトは、この問いがまぎれもなく今日われわれが引き受けなければならないものであることを示すべく、以下のような例を挙げている。出生前診断により遺伝子的に欠陥をもつことが判明した人間の「生まれてこない権利」や、出生に関する様々なリスク調整、二〇〇一年のテロ以降の新しい人道主義戦争、そして民族紛争でのレイプなど。これらは全て二一世紀の出来事である。エスポジトは、これらの出来事を貫くものとして、生政治という概念を中心とした意味の複合体を見出している。[3]

生政治の概念の決定的な理論化を行ったのは、ミシェル・フーコーである。しかし、エスポジトは、フーコーが前述の問いを自覚しつつもそれに完全には答えておらず、むしろ、異なる二つの解釈の間で選ぶのを

ためらっているようであると指摘する。それは、生政治の最終的な帰結が主権的な死の政治であるとするようなネガティブな解釈と、生政治そのものの内に新しい政治的主体の可能性を見いだすようなポジティブな解釈であり、後に、アガンベンとネグリの二極化という形で顕在化する。エスポジトは、そのどちらからも距離をとった立場を模索し、この二極化の原因を、生政治という術語を形成する二つの用語、生と政治との意味の隔たりに見出す。そこで、『ビオス』においてエスポジトがまず行うのは、生政治の概念についての通時的な研究である。語彙の伝統に光をあてることで、フーコーの生政治についての議論をひとつの解釈として相対化し、新たな解釈の視点を構築する道が開けるというのである。

そこで重要となってくるのが、「免疫」という発想である。免疫とは本来、ある病気を予防するために病原体の力を弱めたものを人体に投与すること、あるいはそれによって人体がその病気を識別して排除する働きを意味する。エスポジトはそうした意味作用を生政治のうちに見出し、さらに、近代化のプロセスを免疫化のプロセスと直接的に結びつけてさえいる。というのも、近代は、個人が自己保存を目指すということをあらゆる他の政治的カテゴリー（主権から自由まで）の前提とするからである。エスポジトは、免疫の概念を用いて、フーコーの生政治解釈の乗り越えを試み、ナチズム後の哲学（現象学、科学哲学の一部、ドゥルーズなど）と生政治との関係の分析へと、そして新たな戦略の可能性へとつなげていく。

次章以降では、『ビオス』の中でも特に、エスポジトによる生政治概念の捉え返し、そして免疫化のパラダイムについての記述に注目し、生政治の根本的な問い、すなわち、「なぜ生の政治はいつも死の政治の働きへと転じるリスクをはらむのか」を解決するにあたり、免疫という発想が有効となるその仕方を取り出すことを試みたい。

二、「生政治」概念の捉えなおし

ミシェル・フーコーが「生政治」という概念を再提案・再定義して以来、政治哲学の枠組みは大いなる変化にさらされた。そこでは、「法」や「主権」、「民主主義」という、従来支配的であった諸カテゴリーが、政治哲学に対しあらゆる説明能力を欠いたものとして現れるようになった。もちろん、これらのカテゴリーが完全に政治の舞台から消え去ったわけではない。実際、明文化された法の領域は、国内的、国際的双方においてその活動分野を拡大し続けているように思われる。しかし、重要なのは、このことが司法の主体としての個人の確立を強めるのではなく、むしろ、生きているというただそれだけの単純な事実によって定義される個人を際立たせるということである。たとえば、「人権」と人がいうとき、言及されているのは後者の意味での個人である。それは、〈ビオス〉に対する〈ゾーエ〉としての生の側面であるということもできるだろう。

しかし、生政治という概念はどこか明確さを欠いている。エスポジトによると、そこには、生政治という術語を形成するふたつの用語をむりやりひとつに結びつけているような連関があるのだ。それは、決してフーコーのいう生政治に限られたものではない。エスポジトがこの概念を捉えなおす仕方は、それがフーコーにより「つくり出」された際の意味づけや、フーコー以降の政治哲学研究を追うというものではない。そうで

はなく、エスポジトはこのふたつの用語の結びつきの裏にある対立に言及し、フーコーがこの概念を再定義、再構築するまさにそのときにおける変容を描こうと試みる。(4)

エスポジトはまず、フーコーの生政治の議論が由来するところの諸著作とその著者たちへの言及からはじめる。それらは器官的、人類学的、あるいは自然主義的なアプローチを行うものとして特徴づけられる。(5) まず、一九二〇年代を中心とした、生政治研究の第一の波の中でエスポジトが重要視するのは、スウェーデンの政治哲学者であるルドルフ・チェーレンである。というのも、チェーレンが生政治という術語を用いた最初の人物とみられるからであり、エスポジトは、チェーレンから出発することで、生と政治の結びつき、すなわち生政治の意味論の核心に迫ることができると考えている。

チェーレンの一九〇五年の時点での権力論は、強い諸国家に領土拡大の必要性を自覚させるようなものだったが、一九一六年以降、チェーレンはそうした領土拡大の欲求を、有機的な諸概念との関連において存在するものとして位置づけている。つまり、彼は国家を個人による自由な選択の産物とみなす一方で、個人の本能と自然的な働きがそこへ供給されるという限りにおいて、国家を「生の形式」(Lebensform) として理解するのである。

ここにはすでに国家概念の変容がみられる。ホッブズに由来する近代的概念装置においては、国家は自然状態の克服と関わって成り立つものであった。しかし、チェーレンはその克服の不可能性を『政治的システムの概略』で示している。そこでは、人は人工的なバリアを構築することでしか生命を守り維持することができないが、これは、生命を脅かす紛争を和らげるどころか強化することになると述べられている。政治的なものとは、別の水準での自然の延長にほかならず、政治は自然の本来の特徴を再生産するよう運命づけられているのである。(6) ここに、エスポジトが免疫化と名指すものの基本的なあり方がすでに見てとれる。

第二の波は一九六〇年代のフランスに現れる。エスポジトは、ストラビンスキーの『生政治』やエドガー・モランの『人間の政治へのイントロダクション』などを取り上げる。そこには、ナチの生支配の打倒によって歴史的な枠組みが作り変えられたことによる、生政治の意味論を再び記述する必要性への自覚がみられる。ただし、ここでの生政治の概念は、ある種の伝統的な人道主義へと転覆させられる危険をはらんでもいる。(7)

第三の波は一九七三年の英米からはじまる。そこでは政治と自然という二つの語が重要なものとなる。政治は自然をコントロールしようとするが、決して支配できないし、それと完全に「一致する」こともできない。ここでのアプローチのひとつは、ダーウィンの進化論に基礎をおいており、人間の攻撃的な本性という自然的なものがある限り、戦争は不可避的特徴として起こることになると考えられる。この結論は、チェーレンのアプローチと似ているが、人間の攻撃的な本性を根底に置いているという点で異なっている。

フーコーは、これらの波のまさに最後の一端に位置づけられる。フーコーは、それまでの生政治研究を元にしつつもそこから一定の距離をとり、生政治についての並外れた理論化を行った。彼が七〇年代なかばに始めた研究は、近代がどのように政治や自然や歴史との関係を構築して

きたのかということに関する複雑性と根本性を明らかにした。フーコーはそこで、自覚的に、近代の哲学的‐司法的議論の全面的な枠組みを壊そうとしている。しかし、エスポジトによると、フーコーは、自身が知の新たな形式と定義づけようとするものに反し、むしろ主権者のパラダイムが機能する真のメカニズムを認識しているという。それは、主体同士の間の、あるいは主体と権力との間の関係を規定するメカニズムというよりは、それと〈同時に〉特定の司法的政治的秩序へと主体が服従することのメカニズムである。[8] この秩序において、権利は主権者が支配を行うためのただの道具として使われるのだが、主権者は権利に基づいてのみ支配しうるのである。互いが互いを支えるこうした仕方において、法と権力、合法性と正当性、規範と例外といった、二者択一の裂け目として現れていたものが、同じ意味の体制においてその統合を見出す。そうしたメカニズムは生政治と矛盾するものではなく、それどころか、生政治は主権権力の内的な表現となる。そのようなものである生政治をどう表象すればよいのか。そこで、チェーレンの思考においてその兆しがみえていた免疫的な発想が持ち込まれる。

三、免疫

エスポジトの生政治解釈の鍵となるのは、彼が免疫(化)のパラダイムと呼ぶものである。免疫化、あるいは免疫こそが、生政治という術語を構成する二つの極、すなわち生物学的なものと政治的なものとの間にある意味の隔たりを満たすというのだが、それはどのような仕方でなされるのか。

エスポジトは、免疫を、生を維持保存するひとつの権力のあり方として提示する。[9] そこで、政治は生を生かし続けるということの可能性あるいは道具以外の何者でもない。しかし、その免疫的な政治がまさに生を否定する働き、すなわち死の政治に結びつくのである。ここで、死の政治は、権力が外部から生に課す暴力的服従の形式ではなく、むしろ、生が権力を通してそれ自身を保存するのに用いる、本質的に二律背反のモードである。免疫の原理において、生の政治であることと死の政治であることは同じことの二つの側面であるといえる。

また、エスポジトは、免疫化のパラダイムが完全に生政治研究以降のものではないということを示している。例えば、ホッブズの政治哲学においては「個人に予防接種を行う医療実践と同じように、政治的身体の免疫化はその身体中に同じ病原体の断片を導入することによって機能する」[10] というような、免疫的な原理が見出される。ただし、ホッブズは彼自身が新たに開いたパラダイムの特性を認識しているとはいえない。あるいは、ニーチェが魂から身体へと議論の中心を移行させたとき、彼は魂を、身体を守り閉じ込める免疫的な形式として想定していた。エスポジトは、免疫化の範疇についてはじめて詳しく述べたものとしてニーチェを重要視している。ルーマンのシステム理論もまた、その原理を共有するものとして取り上げられる。

結局のところ、近代化のプロセスが示しているのは、共同体の中にその敵となるものが入り込み、あるいは想定され、予防的に排除されるという免疫化のプロセスなのである。〈イムニタス〉(免疫)は、〈コムニタス〉(共同体)と同じ語源〈ムヌス〉(義務、責任、贈り物)をもつが、一方

がそれを免れ、他方がそれを共にもつという意味を付されているという点で、相反する原理であるといえる。にもかかわらず、免疫化の意味は、反対の原理である共同体のロジックの中に書き込まれる。[11] 免疫化は共同体の原理を前提としているのである。ナチズムは、免疫化のパラダイムを極限まで押し進め、共同体の死にまで行き着いてしまったものといえるだろう。ここで、『ビオス』冒頭のいくつかの例を思い出してみると、これらも同じ免疫化のパラダイムにしたがっていることがわかる。

生政治とは、もとより、生物学的なものが政治の領域に入り込むという意味を含むものであった。しかし、免疫化のパラダイムの導入により、それと同時に政治がある意味において生物学化されるという仕方もまた明らかになった。このパラダイムは、完全な生の規範化、二重の身体の囲いこみ、生の予期的な抑圧という三つの〈装置〉をもつナチの体制において頂点を極める。[12] もちろん、近代化というものが免疫化のパラダイムのみによって解釈可能だというわけではないが、生と政治という二つの要素の結びつきは、ここで新たな意味を得る。

四、おわりに

以上において、われわれは、生政治の解釈が直面している困難について、生政治の構造の内側から解明するエスポジトの試みを追ってきた。エスポジトは、生と政治という二つの要素の結びつきに注目し、その仕方を記述するにあたり免疫という概念が重要なものとなることを示し、生政治解釈の一つの方向性を打ち出した。共同体が自己防衛を行うということはそれが病原体的なものを排除することと表裏一体であり、このことは、生の政治と死の政治が表裏一体であることをも意味する。さらにいえば、免疫の働きという点からすると、生物学的な生はその成り立ちからすでに政治を内包しているということになる。ここに、この著作の表題が『ビオス』であることの意味が伺えるのではないだろうか。生きているというそれだけの、内容のない〈ゾーエ〉としての生は、じつは、生きているというそのことによりすでに〈ビオス〉でしかありえない。そうした意図が、この表題に込められているのではないだろうか。

また、エスポジトは、この著作の後半で、われわれが取り込まれている免疫化のパラダイムを乗り越える方途を模索している。それらは、メルロ＝ポンティの「肉」の概念を用いた身体の反転や、規範の超越性に生を従属させるのでないような新しい規範のあり方の模索といった形をとる。ここでは詳しく論じることはできないが、これらについても今後の研究でさらに検討していきたい。

註

(1) ここで、「生」が示している単語は life である。エスポジトは、life と斜体の bios を区別して用いており、bios の方がより限定的である。そこで、life の方は基本的に「生」と訳し、bios を示す際は〈ビオス〉という表記を用いている。

(2) Roberto Esposito, *BIOS: Biopolitics and Philosophy*, trans. Timothy Campbell, University of Minnesota Press, 2009, p.8

(3) Ibid., p.7

(4) Ibid., p.15

(5) Ibid., p.16

(6) これは、フーコーによるクラウゼヴィッツのテーゼの転倒（「戦争は政治の延長である」から「政治は戦争の延長である」へ）になぞらえたものと思われる。（ミシェル・フーコー、田村俶訳、『監獄の誕生――監視と処罰』、新潮社、一九七七、一七〇頁参照。）

(7) Roberto Esposito, *BIOS: Biopolitics and Philosophy*, trans. Timothy Campbell, University of Minnesota Press, 2009, p.19

(8) Ibid., p.26

(9) Ibid., p.46

(10) Ibid., p.46

(11) Ibid., pp.50-51

(12) Ibid., p.11